

巻 頭 言

日本白鳥の会会長 松 井 繁

大森副会長の訃報に接して

私どもの会が発足してからはや13年になった。発足当時、若かった方々も立派に成長され、かく言う私も60歳を越え、老年の域に足を踏み入れたといえようか。

ところで、いつも言われていることではあるが、私どもの会に若い会員が増えて欲しいものである。この点についてはこれまでいろいろの提案、発言があった。考えてみると年に一度の総会の場だけでは、意志の疎通が充分でないのは言うまでもない。宮城の堺さんから幹事会を設定して会合と活動をもっと活発化したら、という提案がなされている。私も全く同感である。昭和61年の総会ではこのことを最重点議題として、検討したいと考えている。

巻頭言の文章について練っている時—7月14日—に大森副会長の訃報が入ってきた。7月10日夕刻に、先生から電話があった。「会誌原稿の図表を訂正したものを今、封筒に入れたところです。一年程前から身体の調子が良くなかったのが、このところ悪化しました。血小板減少症と十二指腸潰瘍（恐らく癌でしょう）とのことで明日入院します。お世話になりましたがこれが最後の電話となりましょう。〈渡り〉についての原稿もほぼ終わりました。後をどうぞよろしく頼みます。」と言われる。一瞬、私は絶句した。「先生、頑張って下さい。近日中に伺いますから。」とこらうじて申し上げるのみだった。奥様のお話では、病名は急性白血病、直接の死因は脳出血とのことである。

会の創立以来、先生は理事として、また昭和56年以降は副会長としてその重責を果たされ、その間、猪苗代湖のコハクチョウの渡来状況について毎年発表され、その渡りの経路についての考察を報告されていた。昭和55年のIWRB主催の札幌での国際シンポジウムにそれらの研究の概要を報告され、その業績を高く評価された。昭和40年以来、約20年にわたって、寒さの中を、持病の坐骨神経痛、変形性膝関節症による腰、膝の痛みを耐えての白鳥への給餌はどんなに大変なことだったろうと、ただ感服するばかりであった。

私は、先生のこれまでの数々の業績に深く感謝し、この、身を挺してのご努力を無にしないように、会員の皆さんと共に更に努力することを誓い、先生のご冥福を心からお祈りするものである。